

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	無意志自動詞を出自とする 日本語可能表現の歴史的研究
氏 名	三 宅 俊 浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語の可能表現のうち無意志自動詞に由来する可能形式の歴史を明らかにすることで、日本語の歴史における可能表現の内実を具体的に示すことを試みるものである。

日本語可能表現は、副詞エ、補助動詞ウ（得）、ル・ラル、可能動詞、カナウ、ナル、デキル、ラ抜き言葉など、歴史的バリエーションが豊富である。先行研究により「可能形式化する直前に表した意味」による分類が設けられ、〈完遂形式由来〉（副詞エ・補助動詞ウなど）と〈自発形式由来〉（ル・ラル、カナウ、ナル、デキルなど）の二類に分けて把握・整理する試みがなされた。しかし可能動詞の位置づけは不分明であり、さらにカナウ・ナル・デキルの歴史は十分に明らかにはなっていない。ゆえに〈自発形式由来〉という時の「自発」の内実も未だ明らかでない点が多い。

カナウ・ナル・デキルはいずれも無意志自動詞である。さらに、可能動詞も無意志自動詞派生に類推して成立したとする説が有力である。つまり日本語可能表現の歴史は、一部の無意志自動詞がそれを担うようになるルートが大きな一類型をなしているともみなすことができる。では、無意志自動詞であることと「可能」はどのように関係するのか。両者の歴史的な関係性を精確に把握することは、日本語における可能表現の内実を具体的に示すことにつながるが見込まれる。

そこで本論文では、可能動詞およびその延長上にあるラ抜き言葉の歴史、カナウ・ナル・デキルの歴史を記述することを通して、無意志自動詞を出自とする日本語可能表現の全体像を把握することを目指した。

本論文は、第Ⅰ部「可能動詞の成立と展開」（第1章～第4章）、第Ⅱ部「尾張周辺方言におけるラ抜き言葉の成立」（第5章・第6章）、第Ⅲ部「カナウ・ナル・デキルの可能形式化と展開」（第7章～第10章）の3部10章により構成される。

第1章では、中世末期の抄物およびキリシタン文献に現れる「読む」および近世前期資料に見える「言える」「飲める」に着目し、「読む」の意味的・統語的特徴を

記述した。そのうえで、同時代の他の可能形式「レル」「補助動詞「得ル」」と比較検討し、現代語可能動詞の起源は、中世末期に他動詞「読む」から派生した無意志自動詞「読むる」に由来することを述べた。

第2章では、「読むる」を無意志自動詞として位置づけることの妥当性を示すため、同じく下二（一）段活用の無意志自動詞（切るる、取るる等）が「可能」概念と接する条件を整理し、「読むる」が語彙的にその条件に該当することを指摘した。

第3章では、可能動詞の展開を扱った。可能動詞は成立当初、一部の動詞に限られる語彙的な派生現象であったが、近世中頃から、派生範囲が急激に拡大する。こうした変化を惹き起こした要因を可能動詞の意味的な変化によることを明らかにした。

第4章では、中世室町期に四段動詞から新たに派生する下二段活用動詞類全体を取り上げ、ルルとの比較対照から実態を記述した。主たる眼目は、大部分が尊敬に偏って現れる後期抄物の下二段活用動詞群がなぜ近世期まで残らず、可能の意を表わすわずか1語が残り得たのか、という点についてである。本章ではこの問題の解決の糸口となり得る言語事実を報告した。

第5章では、方言出自であると指摘されるラ抜き言葉について、現代語でラ抜き言葉の運用が豊富な地域である尾張周辺の方言を取り上げ、当該地域の近世期文献に現れる可能表現の実態を記述した。結果として、尾張周辺方言では中央語に比べて約100年先行してラ抜き言葉が使用されていたことを明らかにした。

第6章では、尾張地方でなぜ早くラ抜き言葉が出現し得たのかを、同時代比較が可能な上方・江戸文献での実態と比較対照し、尾張地方でラ抜き言葉が早く生じた動機および具体的な成立過程についての仮説を提案した。

第7章では、中古から中世前期にかけて可能形式化するカナウの歴史を記述した。中古のカナウが思考動詞「思ふ」との共起率が高く、中でも「思ふ」が内容節を取る場合に「可能」の表現領域と接し、その環境を端緒に、中世前期以降、行為の実現を表わすようになったことを述べた。

第8章では、中世室町期におけるナルの可能形式化を論じた。ナルは中古に「事柄の実現」を表わす用法を有しているが、「行為の実現」を表わす段階になかった。中世前期以降、次第に行為の結果局面の非実現を表わす用法に傾斜していくようになり、「行為の結果事態の非実現」と「行為の非実現」との類縁性を媒介に可能の意を獲得したことを述べた。

第9章では、ナルの近世期における対人的用法を扱った。中世末期には可能表現として位置づけられる特徴を逸脱しないが、近世期になると、話者が望ましくないと考えていることにも使用できるようになっている。語彙的には、一部の語彙に偏っていく変化が見られることを示した。

第10章では、近世期におけるデキルの可能形式化を論じる。中古以来のイデクは

主としてあるものの「自然発生」を表わしたが、中世末期から近世中期にかけて、作成対象および主体の作成行為の「完成」を表わすようになる。この「完成」用法が、後に可能形式化する際の端緒となったことを述べた。

以上の観察から、可能動詞・ナル・デキルは対象の結果的变化として一括することができる。そしてこれらの形式の可能形式化は、いずれも「中世末期以降」という近接する時期に、類似の意味変化のルートを辿っている。こうした類似の意味変化が、日本語史上の「中世末期以降」という特定の時期に集中して生じた理由について終章で取り上げ、動詞の動的叙述性の強化が中世末期以降に生じたことが関わっている可能性を示唆した。